

## 清代八股文における破題・承題の作成法について (8)

滝 野 邦 雄

### (ix) 『小題文模標準』

王玉藻（字は輝亭，号は拙齋）の『小題文模標準』（光緒九年（一八八三）新鐫）は，承題をつぎのように説明する。

承題は，破題の意を承清するなり。破題が反破なれば，承〔題〕は正承を須<sup>もち</sup>う。破題が正破なれば，承〔題〕は反承を須<sup>もち</sup>う。大約は首句 宜しく反なれば，次句は宜しく正なるべし。末句に破題の意を找足（補足）し，之をして含蓄 盡きざらしむ。[そうすれば] 方に佳作と爲す（『小題文模標準』 卷一・一葉・「破承題論」条）。

承題は，破題の意味を承けてはっきりさせるものである。破題が反破であれば，承題は正承を用いる。破題が正破であれば，承題は反承を用いる。大体は承題の首句が反であれば，次句は正にすべきである。そして末句で破題の意味を補足して，含蓄が尽きないようにさせれば，まさに佳作となる，という。

#### [用例]

破題 一句破面，一句破意法（一句もて面を破き，一句もて意を破くの法）

題目：朽木（『論語』 公冶長）

木以朽木稱 題面，難乎其爲木乎 對下「不可雕」破意 / 夫木自有所以成爲木者 反一句含下「雕」字，亦既朽焉 正轉●字，尚何足爲木乎 我（找）足破題次句之意（木の朽木を以て稱す〔題面〕，難きかな其の木と爲るや [[題目の] 下の「不可雕（雕る可からず）」に對して意を破く] / 夫れ木 自から木と爲る所以の者有り [反一句もて下の「雕」字を含む]，亦た既に朽ちたり [「●」字を正轉す]，尚お何ぞ木と爲すに足らんや [破題の次句の意を我（找：補）足す]（『小題文模標準』 卷一・一葉・「破承題論」条）。

題目：閉門（『孟子』 滕文公下）

門以閉傳 題面，與踰垣<sup>①</sup>有同志焉 伴上文，破題意 / 夫門亦何必閉 反「閉」字，乃不得已而閉焉 正轉，守義之泄柳，與踰垣者將毋同 跟章旨義字我足，破題（門 閉じるを以て傳えるは〔題面〕，垣を踰ゆると志を同じくする有り [上文を伴（ともな）いて，題意を破く] / 夫れ門 亦た何ぞ必ず閉ざさん [「閉」字を反す]，乃ち已むを得ずして閉ざす [正轉す]，義を守るの泄柳と垣を踰ゆる者と將に同じきこと母らんか [章旨の「義」字に跟<sup>したが</sup>いて我（找：補）足し，

題を破く)) (『小題文模標準』 卷一・一葉・「破承題論」条)。

①踰垣: 題目の前後の文は「公孫丑問曰、不見諸侯、何義。孟子曰、古者不爲臣不見、段干木踰垣而辟之、泄柳閉門而不内 (公孫丑 問いて曰く、諸侯に見わざるは、何の義なりや、と。孟子 曰く、古は臣爲らざれば見わず。段干木は垣を踰えて之を辟け、泄柳は門を閉じて内れず) ……」。

②守義之泄柳: 『四書集注』 孟子・公孫丑下・「孟子去齊、宿於晝」条の朱注に「泄柳、魯人。申詳、子張之子也。繆公尊之不如子思、然二子義不苟容 (泄柳は魯人、申詳は子張の子なり。繆公 之を尊ぶも子思に如かず。然れども二子 義として苟容 (いいかげんに仕える) せず) ……」。

題目: 山戯 (『論語』 公冶長)

山以節者 題面、已徵其居蔡之侈 ①「居蔡」是章旨、/ 夫居必有節、亦恒也 從「節」字翻「山」字、獨以山著 正点「山」字、文仲之爲蔡計者、不已侈乎 我足 (山に節を以てする者は [題面]、已に其の蔡を居くの侈を徵 (見て取る) す [「居蔡 (蔡を居く)」は是れ章旨なり] / 夫れ居 必ず節有るは、亦た恒なり [從「節」字翻「山」字]、獨り山を以て著わすは [「山」字を正点す]、文仲の蔡を爲すの計なる者の已に侈ならずや [我 (找: 補) 足す]) (『小題文模標準』 卷一・一葉～二葉・「破承題論」条)。

①踰垣: 題目の前後の文は「子曰、臧文中居蔡、山節、藻稅。何如其知也 (子 曰く、臧文中 蔡を居き、節を山にし、稅に藻きす。何如ぞ其れ知らん)」とあり、朱注に「……居、猶藏也。蔡、大龜也 (居は、猶お藏のこときなり。蔡は、大龜なり)」。

題目: 五母鷄 (『孟子』 盡心上)

畜以五計 題面、欲其生之蕃也 題意 / 夫鷄之爲養、細已甚矣 先承「鷄」字、畜以母而五其數 正承「母」字・「五」字、非欲以蕃其生哉 我足 (畜するに五を以て計る [題面]、其の生くるものの蕃えんことを欲すればなり [題意] / 夫れ鷄の養を爲すは、細かきこと已に甚だし [先ず「鷄」字を承く]、畜 (飼育) するに母 (めんどり) を以て其の數を五とす [「母」字・「五」字を正承す]、以て其の生くるものを蕃やさんと欲するに非ずや [我 (找: 補) 足す]) (『小題文模標準』 卷一・二葉・「破承題論」条)。

題目: 終夜 (『論語』 衛靈公)

夜而終焉 題面、惟恐其日之不足也 伴「日」字、破題意 / 夫夜所以繼日也 ①先承「夜」字、仍伴「日」字、亦既終矣 次承「終」字、歷時不已久乎 我足題意、(夜にして終う [題面]、惟だ其の日の足らざるを恐るるなり [「日」字を伴いて、題意を破く] / 夫れ夜は日に繼ぐ所以なり [先ず「夜」字を承く、「日」字を伴うに仍る]、亦た既に終れり [次に「終」字を承く]、時を慇の已に久しきかな [題意を我 (找: 補) 足す]) (『小題文模標準』 卷一・二葉・「破承題論」条)。

①繼夜: 『孟子』 離婁下に「周公思兼三王、以施四事。其有不合者、抑而思之、夜以繼日、幸而得之、

坐以待旦（周公 三王を兼ね、以て四事を施さんことを思う。其の合わざる者有れば、抑いで之を思い、夜 以て日に繼ぎ（夜を日中に継いで考える）、幸にして之を得れば、坐して以て旦（夜明け）を待つ）」。

題目：拖紳（『論語』郷黨）

紳而拖焉 題面、亦聖人敬君之儀也 「敬君」是章旨 / 夫紳固朝服所必需也 跟「朝服」承「紳」字、於君視時拖之 跟「君視」承「拖」字、非亦夫子敬君之儀乎（紳にして拖くは〔題面〕、亦た聖人の君を敬うの儀なり〔「敬君」は是れ章旨なり〕 / 夫れ紳は固より朝服の必ず需むる所なり〔「朝服」に<sup>したが</sup>跟着いて、「紳」字を承く〕、君の視ゆる時に於いて之を<sup>ひ</sup>拖く〔「君視」に<sup>したが</sup>跟着いて、「拖」字を承く〕、亦た夫子の君を敬うの儀に非ずや）（『小題文模標準』卷一・二葉・「破承題論」条）。

題目：蚤起（『孟子』離婁下）

起而蚤也 題面、睨夫之情迫矣 跟「睨夫」是來脈 / 夫起亦人之常、何足異者 略反一句、乃齊婦獨蚤也 正点「蚤」字、睨夫之情不甚迫乎（起きて蚤（<sup>つと</sup>早朝）にす〔題面〕、夫（良人）を<sup>うかが</sup>睨うの情の迫ればなり〔「睨夫」に<sup>したが</sup>跟着う。是れ來脈なり〕 / 夫れ起きるは亦た人の常なり、何ぞ異とするに足る者ならん〔略は反一句なり〕、乃ち齊の婦 獨り蚤（<sup>つと</sup>早朝）にするなり〔「蚤」字を正点す〕、夫（良人）を<sup>うかが</sup>睨うの情の甚だしくは迫らざらんや）（『小題文模標準』卷一・二葉・「破承題論」条）。

題目：蒲（『中庸』二十章第三節）

以生物警政之敏<sup>①</sup> 跟「政敏」破題意、蒲已可驗矣 題面、 / 夫生物之至敏者、不獨有蒲也 採下「盧」字、夫子欲敢以警政 跟題旨正轉、不可先驗諸蒲乎（生物を以て政の敏なるに譬う〔「政敏」に<sup>したが</sup>跟着いて題意を破く〕、蒲は已に驗（証拠）とす可し〔題面〕 / 夫れ生物の至敏なる者は、獨り蒲有るのみならず〔下の「盧」字を採る〕、〔なのに〕夫子 敢て以て政に譬えんと欲す〔題旨に<sup>したが</sup>跟着いて正轉す〕、先ず諸を蒲に<sup>これ</sup>驗（証拠）とす可からざらんや）（『小題文模標準』卷一・二葉・「破承題論」条）。

①警政之敏：題目の前文は「人道敏政、治道敏樹。夫政也者、蒲盧也（人道 政を<sup>はや</sup>敏くし、治道 <sup>う</sup>樹えることを<sup>はや</sup>敏くす。夫れ政なる者は、蒲盧なり）」とあり、朱注に「敏、速也。蒲盧、沈括以爲蒲葦、是也。以人立政、猶以地種樹、其成速矣。蒲葦又易生之物、其成尤速也。言人存政舉、其易如此（敏は、速なり。蒲盧は、沈括 以て蒲葦と爲す（『夢溪筆談』卷三・辯證一）、是なり。人を以て政を立つるは、猶お地を以て樹を<sup>う</sup>樹えるがごとし。其れ成るの速やかなり。蒲葦は又た生じ易きの物なり。其れ成るの尤も速やかなり。人存すれば政舉がる、其の易きこと此の如きを言う）」。

題目：關雎樂（『論語』八佾）

聖人以風始正人情 「風始」貼關雎是破題面、「正人情」是破題意、而樂可先驗矣 破下載題面 / 夫

關雎之詩、不僅言樂也 探下「哀」字、夫子欲以正人情 正轉、所謂先驗其樂（聖人 風始（「國風の始め」：「關雎」は『詩經』國風の首篇）を以て人情を正す「風始」もて「關雎」を貼る。是れ題面・題意を破く）、而して先ず驗（根拠）とす可きを楽しむ〔下載の題面を破く〕／夫れ關雎の詩は、僅かに樂を言うのみならざるなり〔下の「哀」字を探る〕、夫子 以て人情を正さんと欲す〔正轉なり〕、所謂ゆる先ず其の楽しむを驗（根拠）とす（『小題文模標準』卷一・二葉～三葉・「破承題論」条）。

題目：願車（『論語』公冶長）

賢者有公物之心 破題意、因先以車明所願焉 題面／夫由之志不僅在車也 探下「馬」字、乃明所願而先及之 正点「順」字、殆有公物之心、因即是以見志耳（賢者 物を公（共通）にすの心有り〔題意を破く〕、因りて先ず車を以て願う所を明らかにす〔題面〕／夫れ由（子路）の志は僅かに車に在るのみならず〔下の「馬」字を探る〕、乃ち願う所を明らかにし、而して先ず之に及ぶは「順」字を正点す、殆ど物を公（共通）にすの心有ればなり、因りて是に即して以て志を見すのみ）（『小題文模標準』卷一・三葉・「破承題論」条）。

①由之志不僅在車：題目の後文は「願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾（願わくは車馬衣輕裘、朋友と共にし、之を敝るも憾み無し）……」。

題目：以與爾鄰里（『論語』雍也）

教賢者以濟貧 破題意、當先於鄰里與之焉 題面／夫可與者不獨有鄰里、而鄰里當先與之也 一句探下、一句扣題、夫子教思以此 正轉、不已通周急之義乎（賢者に教うるに貧を濟うを以てす〔題意を破く〕、當に先ず鄰里に於いて之を與うべし〔題面〕／夫れ與う可き者は獨り鄰里有るのみならず、而して鄰里 當に先ず之を與うべきなり〔一句もて下を探り、一句もて題に扣（触れる）す〕、夫子の教思 此れを以て〔正轉なり〕、已に急を周うの義に通ぜざらんや）（『小題文模標準』卷一・三葉・「破承題論」条）。

①周急：題目の前文に「……吾聞之也、君子周急、不繼富（吾 之を聞く、君子 急を周い、不繼富を繼がず）……」、朱注に「……急、窮迫也。周者、補不足。繼者、續有餘（急は、窮迫なり。周とは、足らざるを補う。繼とは、餘り有るを續（継ぎ足す）ぐ）」。

題目：聞弦（『論語』陽貨）

誌所聞於下邑 先破「聞」字、卽弦已見其教之善焉 次破「弦」字、「教善」是破題意／夫弦固夫子所樂聞而非夫子所數聞也 一句正承、一句反承、於武城聞之 正点「聞」字、教之善也、不已見之弦乎（下邑に聞く所を誌す〔先ず「聞」字を破く〕、卽ち弦 已に其の教うるの善なるを見す〔次に「弦」字を破く。「教善」は是れ題意を破く〕／夫れ弦は固より夫子の楽しみ聞く所にして、夫子の數しば聞く所に非ざるなり〔一句もて正承し、一句もて反承す〕、武城に於いて

之を聞くは、教の善なり〔「聞」字を正点す〕、已に之を弦に見さざらんや  
 (『小題文模標準』卷一・三葉・「破承題論」条)。

題目：磽(『孟子』告子上)

①更<sup>①</sup>卽磽<sup>②</sup>以驗地 題面、而瘠<sup>③</sup>薄已甚矣 題意、/夫磽亦不可謂之非地也 反「磽」字、然不爲肥而爲磽 正点「磽」字、則瘠薄不已甚矣(更<sup>ふたたび</sup>び磽(やせ地)に卽して以て地を驗(証拠)とす[題面]、而して瘠薄 已に甚し[題意]/夫れ磽は亦た之を地に非ずと謂う可からざるなり〔「磽」字を反す〕、然れども肥爲らずして磽爲れば〔「磽」字を正点す〕、則ち瘠薄 已に甚しからざらんや(『小題文模標準』卷一・三葉・「破承題論」条)。

①更：「再なり。復なり」(『舉業辨字』觀語辭第四・二十七葉・「更」条)。

②題目の前後は「雖有不同、則地有肥磽。雨露之養、人事之不齊也(〔麤麦(大麦)の種をまけば、日時が経過すると成熟するが〕同じからざる有り」と雖も、則ち地に肥磽(肥瘠の差)有り、雨露の養い、人事の齊しからざればなり)」。

③瘠薄：朱注に「磽、瘠薄也(磽は、瘠薄なり)」。

題目：弋(『論語』述而)

再卽弋以觀聖人 題面、與釣有同心也 伴上文、破題意、/夫弋常事耳 反一筆、然人不獨弋而子獨弋 正点「弋」字、故誌之(再<sup>ふたたび</sup>び弋に卽して以て聖人を觀るに[題面]、釣と心と同じくする有るなり〔上文を伴いて、題意を破く〕/夫れ弋は常事なるのみ〔反一筆なり〕、然れども人は獨り弋のみならず、而して子(夫子) 獨り弋のみなり〔「弋」字を正点す〕、故に之を誌す(『小題文模標準』卷一・三葉～四葉・「破承題論」条)。

題目：草木生之(『中庸』二十六章)

卽草木以驗所生 題面、山之廣大已見矣 ①「山」字是近脈/夫使草木不生、則山之廣大不見、卽天地之生物、亦難見也「天地」是遠脈、觀於草木之生、不已足爲山生色<sup>②</sup>乎(草木に卽して以て生ずる所を驗す[題面]、山の廣大なるは已に見<sup>あら</sup>わる〔「山」字は是れ近脈なり〕/夫れ草木をして生ぜざれしむれば、則ち山の廣大なるは見<sup>あら</sup>われず、卽ち天地の物を生ずるは、亦た見<sup>あら</sup>わし難きなり〔「天地」字は是れ遠脈なり〕、草木の生ずるを觀れば、已に山の色に生ず(外面に現れる)と爲すに足らざらんか(『小題文模標準』卷一・四葉・「破承題論」条)。

①題目の前後の文は「……今夫山、一卷石之多、及其廣大、草木生之、禽獸居之、寶藏興焉(今、夫れ山は、一卷石の多きなり、其の廣大なるに及んでは、草木 之に生じ、禽獸 之に居り、寶藏 興る)……」。

②生色：『孟子』盡心上に「……君子所性、仁義禮智根於心、其生色也、睟然見於面、益於背、施於四體、四體不言而喻(君子の性とする所は、仁義禮智 心に根ざす、其の色に生ずるや、睟然として面に見<sup>おもて</sup>われ、背に益<sup>あふ</sup>れ、四體に施す、四體 言わずして喻る)」。

題目：天子之卿（『孟子』萬章下）

屬卿於天子者 題面，卿以天子貴也 題意，/ 夫卿何異之有 反一筆，而屬之天子則天子貴而卿亦貴矣 正轉題意已足，論班祿者所爲先計之歟（卿を天子に屬するは〔題面〕，卿 天子を以て貴ければなり〔題意〕/ 夫れ卿 何ぞ異なること之れ有らん〔反一筆なり〕，而して之を天子に屬すれば則ち天子貴くして卿も亦た貴し〔題意を正轉し已に足れり〕，班祿を論ずる者は先ず之を計とすと爲す所ならんや）（『小題文模標準』卷一・四葉・「破承題論」条）。

題目：伯一位（『孟子』萬章下）

位有列於伯者 題面，繼公侯而正其爵也 伴上文，破題意/ 夫爵以伯稱，難與公侯比矣 反承，然亦一位也 正承，不可繼公侯而再正其爵乎（位 伯に列する者有るは〔題面〕，公・侯を繼ぎて其の爵を正しくすればなり〔上文を伴いて，題意を破く〕/ 夫れ爵 伯を以て稱さるるは，公・侯と比べ難きも〔反承なり〕，然れども亦た一位なり〔正承なり〕，公・侯に繼ぎて，再び其の爵を正しくす可からざらんや）（『小題文模標準』卷一・四葉・「破承題論」条）。

題目：則不孫（『論語』陽貨）

不孫而出女子小人 題面，近之者自召之也 找近之是題脈，「則」字神理已至/ 夫不孫者不能遽呈其不孫也 反逼「則」字一句，近之則然 一找上文，「則」字自出，女子小人之難養不已見乎「難養」是遠脈（不孫にして女子・小人に出づ〔題面〕，之を近づくる者は自ら之を召くなり〔「近之」を找（補）す。是れ題脈なり。「則」字の神理 已に至れり〕/ 夫れ不孫なる者は遽かに其の不孫を呈する能わざるなり〔「則」字一句に反逼す〕，「之を近づくれば則ち」然り〔一もて上文を找（補）す，「則」字は自から出ず〕，女子・小人の養い難きは已に見われざらんや〔「難養」は是れ遠脈なり〕）（『小題文模標準』卷一・四葉・「破承題論」条）。

題目：斯疏矣（『論語』里仁）

有不期疏而自疏者 題面，非盡友之咎也 嘸找数字，「斯」字神理已到/ 夫友何樂乎疏吾 反承，而竟至於疏焉 正轉，豈盡友之咎哉 仍暗我数字（疏んぜらるるを期せずして自から疏んぜらる者有り〔題面〕，友の咎を盡すに非ざればなり〔数字を嘸し找（補）す。「斯」字の神理 已に到れり〕/ 夫れ友は何ぞ吾を疏んずることを樂しまん〔反承なり〕，而して竟に疏んずるに至る〔正轉なり〕，豈に友の咎を盡くさんや〔暗に仍りて数字を我（找：補）す〕）（『小題文模標準』卷一・四葉～五葉・「破承題論」条）。

題目：舍魚（『孟子』告子上）

可以舍則舍 先破「舍」字，於魚已有然矣 注下「生」字，/ 魚固人所不欲舍 反一筆，而無如



其不能兼也<sup>①</sup> 找上不得兼, 舍之在魚 正轉「舍魚」, 夫物不有然乎 動下文 (以て<sup>す</sup>捨つ可ければ 則ち<sup>す</sup>捨つ [先ず「舍」字を<sup>と</sup>破く], 魚に於いて已に然る有り [下の「生」字を注す] / 魚は固より 人の<sup>す</sup>捨てんと欲せざる所なり [反一筆なり], 而して其の兼ぬる能わざるが如くする無きや [上を<sup>す</sup>找 (補) して兼ぬるを得ず], 之を<sup>す</sup>捨つるは魚に在り [[「舍魚」を正轉す], 夫れ物 然ること 有らざらんや [下文を動かす]) (『小題文模標準』卷一・五葉・「破承題論」条)。

①題目の前後の文は「孟子曰、魚我所欲也、熊掌亦我所欲也、二者不可得兼、舍魚而取熊掌者也 (孟子曰く、魚は我の欲する所なり、熊掌も亦た我の欲する所なり、二者 兼ぬるを得可からざれば、魚を捨てて熊掌を取る者なり) ……」。

題目: 紵兄之臂 (『孟子』告子下)

有屬目於兄之手中者 注下「食」字, 其勢迫於紵矣 題面 / 夫兄之臂何可紵 反一句, 然有屬目於其手中者 探下作轉, 亦何暇計其兄耶 暗承「紵」字 (目を兄の手中に屬する者有り [下の「食」字を注す], 其の勢<sup>ねじ</sup> 紵るに迫る [題面] / 夫れ兄の臂 何ぞ<sup>ねじ</sup>紵る可けんや [反一句なり], 然れども目を兄の手中に屬する者は [下を探りて轉を作す], 亦た何ぞ其の兄を計るに暇あらんや [[「紵」字を暗承す]) (『小題文模標準』卷一・五葉・「破承題論」条)。

題目: 曾是 (『論語』爲政)

即服勞奉養<sup>①</sup>而進接之 暗破「是」字, 其詞若有疑焉 暗破「曾」字 / 夫如是服勞, 如是奉養, 亦爲人子所難矣 頼「是」字, 即反「曾」字, 乃子猶若有疑焉 正轉「曾」字意, 能不即是而進按之歟 回應首句, (「服勞」・「奉養」に即して之に進接す [[「是」字を暗破す], 其の詞 疑い有るが<sup>こと</sup>若し [[「曾」字を暗破す] / 夫れ「是」の如く「服勞」し, 「是」の如く「奉養」するは, 亦た人子の難き所と爲す [[「是」字に頼りて, 即ち「曾」字を反す], 乃ち子も猶お疑い有るが<sup>こと</sup>若く [[「曾」字の意を正轉す], 能く「是」に即せずして之を進接せんか [首句に回應す]) (『小題文模標準』卷一・五葉・「破承題論」条)。

①題目の前後の文は「子夏問孝, 子曰, 色難, 有事, 弟子服其勞, 有酒食, 先生饌, 曾是以爲孝乎 (子夏 孝を問う, 子 曰く, 色 難し, 事有れば, 弟子 其の勞に服し, 酒食有れば, 先生に饌す, <sup>かつ</sup>曾て<sup>こと</sup>是を以て孝と爲さんや)」。

反破法

題目: 年<sup>①</sup> (『論語』陽貨)

人苟不忽其年也 反對下文見「惡」, 聖人正不必念及其年矣 反按「年」字 / 夫人同此年 承明「年」字, 而年果不忽否乎 映下見「惡」, 妙●活筆, 子能不念及其年歟 正按「年」字, 是還題位 (人 苟<sup>も</sup>し其の「年」を忽せにせざるや [反して下文の「見惡 (惡まる)」に對す], 聖人 正に必ずしも其の「年」に念及せず [反して「年」字を按ず] / 夫れ人 此の「年 (年四十)」に

同じなりて「年」字を承明す, 而して「年(年四十)」は果して忽せにせざるや否や「下の「見悪(悪<sup>にく</sup>まる)」を映す。妙●活筆, 「さらに」子 能く其の「年」に念及せざらんか「正にして「年」字を按ず。是れ題位に還すなり) (『小題文模標準』 卷一・五葉・「破承題論」条)。

①題目の前後の文は「子曰, 年四十而見悪焉, 其終也已(子 曰く, 年四十にして悪<sup>にく</sup>まる, 其れ終らんのみ)」。

### (x)『蒔花小築牖蒙草』

江峯青の『蒔花小築牖蒙草』(光緒十九年(一八九三)刻: 光緒十八年(一八九二)自序)は, 「承題」をつぎのように説明する。

#### [承題]

承題に至れば則ち破題の意を承明にす。人物 皆な直説す可し。三四句を以て率と爲す。首句は須らく本題より説き起こすべし。[題目として出題されていない] 上 [の部分] に連なる可からず。末句は須らく本題を收住すべし。[題目として出題されていない] 下文の氣を溢れさす可からず。須らく破題と相い應ずべし。破題の未だ説明を経ざる者は, 都て剖析清楚なるを要す。起に「夫」字を用い, 間に亦た「甚矣」字・「蓋」字を用い, 收に「乎」・「哉」・「耶」・「歟」等の字を用いて, 聲韻 較や高くす。その他の虚字を用いる, 或いは用いざるかは, 臨文に在りて斟酌す。若し起の數字と破題の起處と同じなれば, 是れ平頭なり。收の數字と破題の收處と同じなれば, 是れ並脚なり。俱に不可なり。破[題]・承[題] は只だ我が意を以て斷做す (『蒔花小築牖蒙草』 作文程式・三葉～四葉)。

承題は, 破題の意味を承けて明らかにする。人物は, 代字を用いずに直接に表現する。三四句を標準とする。承題の首句は題目の本題より説き起こすべきである。題目として出題されていない上の部分に連ねてはいけない。末句は, 題目の本題を収めておく。題目として出題されていない下文の語気を溢れさせてはいけない。破題と対応させなければならない。破題でまだ解き明かしていないものを持ち出すときは, はっきりと説明するべきである。首句に「夫」字を用い, 間の句には「甚矣」字・「蓋」字を用い, 末句に「乎」・「哉」・「耶」・「歟」等の字を用いて調子を高くする。その他の虚字を用いるかどうかは, 実際の文を書くにあたって考える。もしも承題の首句のいくつかの文字と破題の首句と同じであれば, 「平頭」となる。承題の末句と破題の次句と同じであれば「並脚」となってしまう。両方ともに不可である。破題・承題は, 自分の考えを用いて作り出す, という。

#### [用例]

題目: 其爲人也孝弟 (『論語』 學而)



孝弟非難事也、第爲之而已 / 夫人之不爲孝弟者、皆以孝弟爲難也、抑知孝弟非難爲者哉 (孝弟は難事に非ざるなり、<sup>た</sup>第だ之を爲すのみ / 夫れ人の孝弟を爲さざる者は、皆な孝弟を以て難しと爲すなり、抑そも孝弟は爲し難き者に非ざるを知るや)

[破題上句:] 正破なり。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 破題の首句を反顧す。[承題三句:] 破題に應じて收む (『蒔花小築牖蒙草』 不分卷・「承題」条・一葉)。

題目: 學而時習<sup>①</sup>之 (『論語』 學而)

學有恒功、時習其要也 / 夫有時而學・有時而不學、是無恆也、安得時習者而與言學哉 (學に恒の功有り、「時習」は其の要なり / 夫れ時にして學ぶ有り・時にして學ばざる有るは、是れ恆無きなり、安んぞ「時習 (時に習う)」者を得て與に學を言うや)

[破題上句:] 上句は意を破く。[破題下句:] 下句は點醒す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 破題に應ず。[承題三句:] 虛神を收合す (『蒔花小築牖蒙草』 不分卷・「承題」条・一葉)。

題目: 見賢思齊焉 (『論語』 里仁)

學貴親賢、知所取法而已 / 夫人所以急親賢者、謂其取法有資也、苟不思齊、不亦見如未見哉 (賢に親しむを貴ぶを學ぶは、取る所の法を知るのみ / 夫れ人「賢に親しむを急に<sup>②</sup>する」所以の者は、其の「法を取る」の資有るを謂うなり、苟し「齊しからんことを思<sup>③</sup>」わざれば、亦た<sup>み</sup>見ても未だ<sup>み</sup>見ざるが如きならざらんや)

①急親賢:『孟子』盡心上に「孟子曰、知者無不知也。當務之爲急。仁者無不愛也。急親賢之爲務 (孟子曰く、知者は知らざること無きなり。當に務むべきを之れ急と爲す。仁者は愛せざること無きなり。賢に親しむを急に<sup>み</sup>するを之れ務めと爲す) ……」。

②取法:『孟子』滕文公上に「有王者起、必來取法。是爲王者師也 (王者の起こる有れば、必ず來りて法を取らん (手本とする)。是れ王者の師と爲るなり)」。

③見: 題目の下文に「見不賢而内自省也 (不賢を見ては内に自ら省みる)」。

[破題上句:] なし。[破題下句:] 「思齊」を暗破す。

[承題一句:] 正面承明なり。[承題二句:] なし。[承題三句:] 反轉なり。[承題四句:] 反收なり (『蒔花小築牖蒙草』 不分卷・「承題」条・一葉)。

題目: 達不離道 (『孟子』 盡心上)

道存於未達之先、達亦未嘗離也 / 夫守道之士、雖未達而已然、今既達矣、道得行矣、而<sup>ママ</sup>猥 (猶) 云離哉 (道は未だ達せざるの先に存すれば、達するも亦た未だ嘗て離れざるなり / 夫れ道を守るの士、未だ達せざると雖も已に然り、今既に達し、道 行なうを得、而して猥<sup>ママ</sup> (猶) お

離ると云うや)

[破題上句・下句:] 暗 [破] して [題目の] 上句の意に<sup>したが</sup>跟う。並びに [題目の] 上節の内に在るを包む。

[承題一句:] 「土」字に<sup>したが</sup>跟う。[承題二句:] 承明す。[承題三句:] 本位に轉入す。[承題四句:] なし。[承題四句:] 「不離」に扣 (触れる) れ合す (『蒔花小築牖蒙草』 不分卷・「承題」条・一葉)。

### (xi) 『搭題文模了然』

光緒十三年 (一八八七) 新鐫『搭題文模了然』は、破題・承題を「明破法」・「暗破法」・「對破法」・「串破法」・「一明一暗法」・「交互破法」に分け、またそれを題目の種類によって細分して説明する。

なお『搭題文模了然』における承題の説明は、すでに (1) 破題の解説と用例の (x) 『學海津梁』・『斯文規範』・『搭題文模了然』で紹介した。以下では、「明破法」などの解説と用例を示す。

[用例]

明破法

或いは題中の要緊の字を拈 (つまみと) りて破を作る。或いは下截と關すること有る字を拈りて破を作る。明破と雖も、亦た和盤托出 (洗いざらいさらけ出す) す可からず (『搭題文模了然』 卷一・一葉・「明破法」条)。

題目の要点となる文字をとりだして破題を作る。もしくは、截去された下の部分と関連する文字をとりだして破題を作る。ただし明破であっても、洗いざらいさらけ出すべきではない。

[割截題明破法]

解説なし。

[用例]

題目: 今不取, 後世 (『論語』 季氏)

忽於今者, 罔恤其後矣 / 夫取則取耳, 而或曰不取者, 則但爲今計也, 將如後世何 (今を忽にする者は, 其の後を<sup>うれ</sup>恤うる罔し / 夫れ取れば則ち取るのみ, 而して或いは曰「取らず」と曰う者は, 則ち但だ今の爲に計るなり, 將た後世を<sup>は</sup>如何せん)

[破題:] 意 恰 (確實) にして, 詞 清し。

[承題:] 下意 擊たずして自から動く (『搭題文模了然』 卷一・一葉・「割截題明破法」条)。

題目：而后嫁者 于歸（『大學』傳第九章第二節～第六節）

嫁無所待，可賦于歸矣／夫嫁而知養子<sup>①</sup>，慈之不假強爲<sup>②</sup>也，而如曰學焉<sup>③</sup>，何詩人遽賦于歸哉（嫁するに待える所無ければ，「于に歸ぐ」と賦う可し／夫れ嫁して，子を養うを知る，之を慈しむは強いて爲すことに假らず，而して「學」と曰うが如し，何ぞ詩人 遽かに「于に歸ぐ」と賦わんや）

①養子：題目の截去された上文と題目に「未有學養子而后嫁者（未だ子を養うことを學んで而して后に嫁する者有らず）」。

②不假強爲：題目の「[康誥曰・・] 而后嫁者」の朱注に「此引書而釋之，又明立教之本不假強爲，在識其端而推廣之耳（此れ『書』を引きて之を釋す。又た教を立つるの本は，強いて爲すことに假らず，其の端を識りて之を推廣するに在るを明らかにするのみ）」。

③曰學焉：①参照。

總じて上下一片を説き得るを要す（『搭題文模了然』卷一・一葉・「割截題明破法」条）。

題目：孰敢不正 二句（『論語』顔淵：「孰敢不正」と「季康子患盜問於孔子」）

不正者胥歸于正，無庸以盜爲患矣／夫民之不正，以其有敢心也，而甚者乃至爲盜，康子果能正人之不正，何患此哉（不正なる者 胥正に歸すれば，盜を以て患と爲すを庸いること無し／夫れ民の正しからざるは，其の敢てするの心有るを以てなり，而して甚しき者は乃ち盜と爲るに至る，[季] 康子 果して能く人の正しからざるを正せば，何ぞ此れを患わんや）（『搭題文模了然』卷一・一葉～二葉・「割截題明破法」条）。

割截題反破明破式

文を作るに宜しく反筆を多用すべし。割截題は尤も要なるは，入手に便ち反振す<sup>②</sup>。最も人をして色動せしむ（『搭題文模了然』卷一・二葉・「割截題反破明破式」条）。

①反筆：『初學題類文法合編』に「凡そ題に正面有れば，必ず反面有り。反面より發揮すれば，則ち正面 愈々 醒す<sup>はっきり</sup>。惟だ反面の[題目の]上下の文に在る者は，此の法を用いる可からず」（光緒五年『初學題類文法合編』卷下・一葉・「反筆」条）。

②反振：『斯文規範』に「振は，動なり。字面に於いて未だ出でざるの先に反筆を用い，以て題中の字面を振動するを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十五葉・「一曰反振」条）。

反筆を多用すべきである。割截題の解法で最も重要なのは，最初に反振することである。そうすれば，ひとの顔色を変えることができる。

[用例]

題目：此之謂民之父母 節彼南山（『大學』傳第十章第三節～第四節）

父母之稱易副也，南山當無異詞矣／夫惟有父母之實，始對南山而歌父母也，不然南山猶是也，

而其情變矣（父母の稱は副<sup>そ</sup>え易し、南山は當に異詞無かるべし／夫れ惟だ父母の實有り、[そうして]始めて南山に對して父母を歌うなり、然らざれば南山は猶お是のごとく[石巖巖と]して、其の情 變ず）

〔破題：〕下文は一切盡く言外に在り。

〔承題二句：〕串下●妙。

〔承題末句：〕下を涵<sup>みく</sup>めて虚活す。

一たび理の實を破<sup>と</sup>けば、虚氣 沾沾（執着）せず下を照し、下意 自から動く（『搭題文模了然』卷一・二葉・「割截題反破明破式」条）。

題目：詩三百一言（『論語』爲政）

使詩而必以多見也、則一言誠未可恃矣／夫讀詩而不三百、與讀詩而必三百、皆非深於詩者也、有一言焉、何必三百（詩にして必ず多見を以てせしむるや、則ち「一言」は誠に未だ恃む可からず／夫れ詩を讀みて三百ならずと、詩を讀みて必ず三百なるとは、皆な詩に深き者に非ざるなり、[孔子の蓋（包括）した]「一言」有り、何ぞ必ず三百ならん）

〔破題：〕下意を反振す。

〔承題：〕「蔽」字の意有り。然れども下を犯さず（『搭題文模了然』卷一・二葉・「割截題反破明破式」条）。

〔割截題抱上文明破式〕

上載の上文に當に補すべき者有れば、割截題と雖も、亦た畧す可からず。此の法 必ずしも小題偏全題のみを然りとせざるなり。然れども一句もて破<sup>と</sup>きて兼ね補すと雖も、必ず落套（俗な形式に陥る）する可からざるを要す（『搭題文模了然』卷一・二葉・「割截題抱上文明破式」条）。

題目から截去された上文に題目の内容を補足するものがあれば、割截題であってもそれを省略すべきではない。この解法は、必ずしも小題偏全題だけに通用するものではない。しかし、一句だけで題目を破<sup>と</sup>き上文に題目の内容を補足したとしても、俗なものに陥るべきではない。

〔用例〕

題目：[子夏曰、君子有三變、望之儼然、即之也] 温、聽其言也厲（『論語』子張）

温即儼然之君子也、聽其言而又變矣／夫君子之温、望而未即者不知、然即而不聽其言、又烏知其温而厲乎（温は儼然に即<sup>つく</sup>くの君子なり、其の言を聽けば又た變ず／夫れ君子の温 望みて未だ即<sup>つく</sup>かざる者は知らず、然れども即<sup>つく</sup>きて其の言を聽かざれば、又た烏<sup>いづくん</sup>ぞ其の温にして厲<sup>はげ</sup>しきを知らんや）

〔破題上句：〕補上●●。

〔破題下句:〕「變」字を抱きて、爲題●根。

〔承題首句:〕再び補す。

〔承題二句:〕本文の上截を抱く

上文に近づくを脱せず、上文を總べるを畧さず、第一項を捨てず、又た贅（附属するもの）を畧さず、圓妙と謂う可し（『搭題文模了然』卷一・二葉・「割截題抱上文明破式」条）。

題目:〔子貢問政、子曰、足食、〕足兵、民〔信之矣……〕（『論語』顔淵）

兵以衛食、可進驗其民矣 / 夫兵之未足、雖有足食之民、而未可恃也、養之而復有以衛之、不可進驗其民乎（兵 以て食を衛り、驗（根拠）を其の民に進む可し / 夫れ兵の未だ足らざれば、食に足るの民有りと雖も、未だ恃む可からざるなり、之を養いて復た以て之を衛ること有れば、驗（根拠）を其の民に進む可けんや）（『搭題文模了然』卷一・三葉・「割截題抱上文明破式」条）。

〔割截題照下文明破式〕

下截 若し係れ陡截なれば、下文は必須ず涵照すべし。破題の處は、須く上截を關合すべしと雖も、尤も須く下文を照起すべし。此れ全く語の妙に在り（『搭題文模了然』卷一・三葉・「割截題照下文明破式」条）。

①『斯文規範』に「題〔目〕の正意・喻意もて俱に上面の喻意を講じ關合（関連呼応）し、下面の正意に着する有るを言うなり」（『斯文規範』卷之四・六葉～七葉・「一日關合」条）。

題目から截去された下文が題目との広く関連するものであれば、下文はかならず含めて反映させるべきである。破題のところで、題目から截去された上文を関連呼応させるといっても、とりわけ下文を反映させるべきである。これらはすべて言葉の精巧さにある。

〔用例〕

題目:〔子謂仲弓曰、〕犁牛之子、騂〔且角、雖欲勿用、山川其舍諸〕（『論語』雍也）

牛屬犁牛、其子則既〔割注:「趁」は「且」字なり〕騂矣 / 夫使牛竟以犁累其子、則必不容有騂矣、既生騂焉、即屬犁牛之子何傷乎（牛 犁牛（毛色のまだらな牛）に屬す、其の子 則ち既に騂し / 夫れ牛をして竟に犁を以て其の子に累らしむれば、則ち必ず騂有る容からず、既に騂を生む、即ち犁牛に屬するの子 何ぞ傷まんか）

〔破題:〕〔下截の〕「雖欲勿用」の句は、亦た能く照起す。

〔承題首句:〕「累」字は、章旨に恰合す（『搭題文模了然』卷一・三葉・「割截題照下文明破式」条）。

題目：其嚴乎 二句（『大學』傳 第六章第三節～第四節）

曾子曰，所視十手所指，其嚴乎。

富潤屋，德潤身。必廣體胖。故君子必誠其意）

①獨之嚴，潤者當不徒在室矣 / 夫幽獨之嚴天庭也，致其嚴而潤出矣，富之於屋，非其易見者乎（獨の嚴なるを知り，潤なる者は當に徒に室のみに在るべからず / 夫れ幽獨の嚴 天庭なり，其の嚴を致して而して潤い出づ，富の屋に於ける[ものに比べて]，其の見易き者に非ずや）

①獨之嚴：題目の「曾子曰，所視十手所指，其嚴乎」句の朱注に「……言雖幽獨之中，而其善惡之不可揜如此。可畏之甚也（言は幽獨（人知れずただひとり）の中と雖も，而れども其の善惡の揜う可からざる事此の如し。畏る可きの甚しきなり）」。

②幽獨之嚴：①参照。

[破題:] 下句は立竿見影（効果てきめん）なり。

[承題首句:] 下を串きて致す有り。

[承題末句:] [題目の] 語意 下句を盡くさざれば，之を呼びて出ださざらんと欲す  
承題は，下を串く可からず。又た武斷なる可からず。此れ式と爲す可し（『搭題文模了然』卷一・三葉・「割截題照下文明破式」条）。

[兩截有公共字面題明破式]

解説なし

[用例]

題目：一則以喜一（『論語』里仁：子曰，父母之年，不可不知也，一則以喜，一則以懼）

喜僅居其一，當思更有其一矣 / 夫知其可喜，是喜居其一也，然知其一，不又當知其一乎（僅しみて其の「一」に居るを喜び，當に更に其の「一」有るを思うべし / 夫れ其の喜ぶ可きを知る，是れ其の「一」に居るを喜ぶなり，然れども其の「一」を知るは，又た當に其の「一」を知るべからざらんや）

[破題:] 兩つの「一」字もて分明にす（『搭題文模了然』卷一・三葉・「兩截有公共字面題明破式」条）。

題目：審問之 有弗問（『中庸』第二十章第十八節～第十九節）

問必期於審，無庸以弗問爲慮也 / 夫審問者問其所學，而審（愼）思明辨因之至篤行，則學不徒博矣，故弗學無害其博，即弗問亦所時有耳（問うに必ず審かなるを期す，問わざるを以て慮と爲すを庸<sup>もち</sup>いる無きなり / 夫れ審かに問う者は其の學ぶ所を問う，而して「審（愼）思」「明辨」は之に因りて，「篤行」に至る，則ち學は徒に博きのみならず，故に「學ばざる（学び残す）」は其の博きを害する無し，即ち「問わず（問い漏らす）」は亦た時に有る所なるのみ）



[破題:] 上下各々實際に還す。此れ等題は清楚を以て妙と爲すに縁ればなり。

既に須らく上を抱くべし。又た須らく中間等の項を消納(受け入れる)すべし。又た須らく兩頭を綯(丸めて結ぶ)べし。此の格 知らざる可からず(『搭題文模了然』卷一・四葉・「兩截有公共字面題明破式」条)。

題目: 則形, 形(『中庸』第二十三章)

有不以形始者, 自不以形止矣 / 夫形由於<sup>①</sup>誠, 而誠固不盡於形也, 欲進觀其誠盍仍觀其形(形わるを以て始めとなさざる者有り, 自から形わるを以て止まるとなさず / 夫れ形わるは誠よりす, 而して誠は固より<sup>あら</sup>形わるに盡きず, 其の誠を進み觀んと欲すれば, 盍ぞ其の形わるを觀るに<sup>よ</sup>仍らざらん)

①形由於誠: 題目を含めた『中庸』第二十三章は「其次致曲, 曲能有誠, 誠則形, 形則著, 著則明, 明則動, 動則變, 變則化。唯天下至誠爲能化(其の次は曲を致す, 曲なれば能く誠有り, 誠なれば則ち<sup>あら</sup>形わる, 形われれば則ち著<sup>いちじろ</sup>し, 著しければ則ち明<sup>いちじろ</sup>かなり, 明なれば則ち動かす, 動かせば則ち變ず, 變ずれば則ち化す。唯だ天下の至誠のみ能く化することを爲す)」。

[破題:] 筆 分水嶺(境界)の如し。何等●●, 何等●●。

[承題首句:] 上を抱く。

[承題末句:] 確としては是れ下載の「形」字なり(『搭題文模了然』卷一・四葉・「兩截有公共字面題明破式」条)。

[長割截明破式]

明破もて界劃(区分)すれば更に<sup>あきらか</sup>清なり。一切を包舉(包括)し不纏不繞<sup>おもむき</sup>の概有るを要す(『搭題文模了然』卷一・四葉・「長割截明破式」条)。

明破で題目を区分すれば, さらにはっきりする。すべてを包括し纏わりつかないようなおもむきがあることが必要である。

[用例]

題目: 齊宣王見孟子於雪宮 明堂(『孟子』梁惠王下第四章～第五章)

雪宮之樂不在民, 明堂所以議毀也 / 夫使齊王與民同樂, 民且恐其毀雪宮矣, 人不得則非其<sup>①</sup>上, 明堂所由議毀與(雪宮の樂は民に在らず, 明堂 <sup>こぼ</sup>毀つを議す所以なり / 夫れ齊王をして民と樂しみを同じくせしむれば, 民 且に其の雪宮を<sup>こぼ</sup>毀つを恐れんとす, 「人 得ずして其<sup>かみ</sup>の上を<sup>そし</sup>非る」は, 明堂の毀つを議すに由る所なるか)

①人不得則非其上: 題目の題四章に「齊宣王見孟子於雪宮。王曰, 賢者亦有此樂乎。孟子對曰, 有。人不得則非其上矣。不得而非其上者, 非也(齊の宣王 孟子に雪宮<sup>あ</sup>に見う。王 曰く, 賢者も亦た此の樂しみ有るか, と。孟子 <sup>こた</sup>對えて曰く, 有り。人 得ざれば則ち其の上<sup>かみ</sup>を<sup>そし</sup>非る。得ずして其の上<sup>かみ</sup>を<sup>そし</sup>非る者

は、非なり) ……」。

[承題二句:] 心思 巧なり。

破題の蒼老(雄健で老練)にして、筆力 雄快なり。承題の下を申く處<sup>つらぬ</sup>の尤も佳なるを學ぶ可し(『搭題文模了然』卷一・四葉・「長割截明破式」条)

[無情割截題明破式]

説かざるを以て成して<sup>くさび</sup>櫛するを上と爲す(『搭題文模了然』卷一・四葉・「無情割截題明破式」条)。

題目をはっきりと説明せず、くさびをうつような文を作成したのをすぐれたものとする。

[用例]

題目: 不敢嘗。既焚(『論語』郷黨)

以不敢者愛其身、可推諸既焚時矣/夫不嘗未達之藥、所以愛其身也、然豈僅愛其身哉、盍於既焚時觀之(敢てせざる者を以て其の身を愛す、<sup>これ うまや や</sup>諸を既焚けるの時に推す可し/夫れ未だ達せざるの藥を<sup>なん うまや や</sup>管めざるは、其の身を愛する所以なり、然れども豈に僅かに其の身を愛さんや、盍ぞ既焚けるの時に之を觀ざるや)

[破題下句:] 一の「推」字を用いて申合す。

[承題末句:] 並びに能く下を照す(『搭題文模了然』卷一・四葉～五葉・「無情割截題明破式」条)。

題目: 至於道。子曰觚(『論語』雍也)

聖人以道易天下、而寄其意於觚焉/夫國以至道爲期、器即道之所寓也、一觚雖微、不可以觀世變哉(聖人 道を以て天下を易う、而して其の意を觚に寄す/夫れ國は道に至るを以て期と爲す、器は即ち道の寓する所なり、一つの觚は微なりと雖も、以て世の變を觀る可けんや)

[破題下句:] 沾(増添)せず脱せず。大家の舉止あり。

[承題二句:] 申合して理有り(『搭題文模了然』卷一・五葉・「無情割截題明破式」条)。

破題の筆情・高邈なるは、俗手の穿鑿牽扯(牽強付会)に<sup>くら</sup>視べて、何ぞ啻だ天淵(天と地との違い)ならんや(『搭題文模了然』卷一・五葉・「無情割截題明破式」条)。

[全偏題明破式]

上截を破きて須く圓渾(洗練されて味わい深い)なるべし、下截を破きて須く顯豁(はっ

きりして通じる) なるべし、須く手法を見すべし。總じて理を説くを以て上と爲す(『搭題文模了然』卷一・五葉・「全偏題明破式」条)。

題目より截去された上文を破いて洗練されて味わい深くすべきである。題目より截去された下文を破いてはっきりして通じさせるべきである。手法を示すべきである。だいたい理を説明することを上とする。

#### [用例]

題目: 子之所慎齋戰(『論語』述而: 子之所慎、齋・戰・疾)

所慎有大端、齋戰其先務矣 / 夫子固無事不慎者也、豈獨齋戰、而齋戰要可先見其慎也、故並舉之(慎しむ所に大端有り、齋・戰は其の先務なり / 夫れ子 固より事として慎しまざる者無きなり、豈に獨り齋・戰ならん、而るに齋・戰は先ず其の慎しむを見す可きを要するなり、故に並びに之を舉ぐ)

[承題首句:] 全冒す。

[承題末句:] 是れ兩項なり(『搭題文模了然』卷一・五葉・「全偏題明破式」条)。

此れ亦た通套なり。但だ明顯(容易)にして初學の門徑を尋ぬるに利するのみ。當に其の法を知りて務めて此れを學ぶ可からざるべきなり。

題目: 君子無終食 二句(『論語』里仁)

表君子存仁之密、即造次已足徵矣 / 夫終食無違爲仁之功密矣、而造次即終食之推也、觀於造次、其無違也已信(君子の仁を存するの密を表にす、造次に即きても已に徵(証する)に足る / 夫れ終食も違ふこと無きは、仁を爲すの功 密なり、而して造次も終食の推(推し及ぼす)に即くなり、造次を觀ても、其の違ふこと無きや已に信なり)

①功密: 題目の朱注に「言君子爲仁、自富貴貧賤取舍之間、以至於終食造次顛沛之頃、無時無處而不用其力也。然取舍之分明、然後存養之功密。存養之功密、則其取舍之分益明矣(言は君子の仁を爲すは、富貴・貧賤・取舍の間より、以て終食・造次・顛沛の頃に至るまで、時無くして、處りて其の力を用いざる無きなり。然れども取舍の分 明らかにして、然る後に存養の功 密なり。存養の功 密なれば、則ち其の取舍の分 益ます明らかなり)」。

[承題二句:] 「子●」を申きて苟にせず(『搭題文模了然』卷一・五葉・「全偏題明破式」条)。

題目: 子有三變望之儼然(『論語』子張: 子夏曰、君子有三變、望之儼然。即之也溫、聽其言也厲)

善觀聖者知其變、難盡於一望中矣 / 夫使君子不變、則始終一儼然耳、變而曰三、彼望者烏乎知之(善く聖者を觀て其の變を知れば、一望の中に盡し難し / 夫れ君子をして變ぜざらしむれば、則ち始終一の儼然なるのみ、變じて「三」と曰う、彼の望みし者は、烏乎之を知るか)

[破題:] 渾なる者は却って明明なり。下文の明明なる有るは是れ本位なり。

[承題二句:] 上 [截]・下截は、偏拈するを得ず、倒置するを得ず。

[承題末句:] 挑別を事とせずして下意 悉く動けば、題界 却って勒して清きを得。

落套（俗に陥いる）せず、又た全偏の法を失わず。破 [題]・承 [題] の題字を分かち處の字 字 分明にし、又た字字に出力す。學者 當に奉じて幸●と爲すべし（『搭題文模了然』卷一・五葉～六葉・「全偏題明破式」条）。

題目：問於齊 二句（『孟子』梁惠王下）

使<sup>①</sup>偪滕而止一齊也、則滕可竟事齊矣 / 蓋滕之偪不僅一齊問於齊楚、楚亦一齊也、滕宜事齊、滕僅宜事齊耶（滕に偪るに一の齊に止まらしむれば、則ち滕 竟に齊に事うる可し / 蓋し滕の偪らるるは僅かに一の齊のみならず、齊・楚に間（はさまれる）すれば、楚も亦た一の齊なり、滕 宜しく齊に事うべきや、滕 僅かに宜しく齊に事うべきか）

①功密：題目の次章に「滕文公問曰、齊人將築薛。吾甚恐。如之何則可（滕文公 問いて曰く、齊人將に薛に築かんとす。吾 甚だ恐る。之を如何とすれば則ち可ならん、と）……」とあり、その朱注に「薛、國名、近滕。齊取其地而城之。故文公以其偪己而恐也（薛は、國名なり、滕に近し。齊 其の地を取りて之に城つくる。故に文公 其の己に偪るを以て恐るるなり）」。

[破題:] 一の「齊」字・「楚」字を破き、自から反逼に到る。「乎」字 更に緊なり。

[承題二句:] 側申し、分寸<sup>はじめ</sup>有り（『搭題文模了然』卷一・六葉・「全偏題明破式」条）。

[偏全題明破式]

上偏は必須<sup>かなら</sup>ず上を補す。然れども包舉（包括）して遺す無く、又た絶えて力を費やさざれば<sup>まさ</sup>方に佳し。且つ本題 明破して上を補するに、暗補を用うれば<sup>まさ</sup>方に均匀（均一となり当を得る）なり。然れども最も滑套（上滑りな様式）を忌く。須らく説き得て理有るべし。下截の處を<sup>と</sup>破くに於いて、明補も亦た可なり。便捷（臨機応変）にして累贅（まわりくどい）なる可からざるを要す（『搭題文模了然』卷一・六葉・「偏全題明破式」条）。

上偏は必ず題目から截去された上文を補足する。しかし、余すところなく包括しても、その個所に全力を費やさなければよい。さらに題目を明破して截去された上文を補足するのに、暗補を用いたならば均一となり当を得る。しかし、最も上滑りな様式を避ける。理があるように説くべきである。題目から截去された下文を<sup>と</sup>破くにあたっては、明補を用いてもかまわない。臨機応変で、まわりくどくないことが必要である。

## [用例]

題目：執禮 言也（『論語』述而：子所雅言，詩書執禮，皆雅言也）

禮以範誦讀者之心，聖言之益人多矣 / 夫禮有不執，雖日習詩書無益也，執之而言者實矣，聖教何所不該哉（禮は以て誦讀する者の心を範（規範）とす，聖言の人を益するや多し / 夫れ禮 執（朱注に「執，守也」）らざる有れば，日々詩書を習うと雖も益無きなり，之を執りて言う者は實あり，聖教 何の該らざる所あらんや）

①禮以範誦讀者之心：朱注に「禮獨言執者，以人所執守而言，非徒誦說而已也（禮 獨り「執」と言う者は，以人の執守する所を以て言う，徒に誦說するのみに非ざるなり）」。

[破題上句:] 上を暗補し實理有り。

[破題下句:] 「皆」字を暗破す（『搭題文模了然』卷一・六葉・「偏全題明破式」条）。

題目：魚躍 察也（『中庸』第十二章第三節）

有以躍爲飛者，上與下皆道也 / 夫魚以躍爲飛，猶鳶之以飛爲躍也，即詩言以觀道，不可見其上下均察哉（躍るを以て飛ぶと爲す者有り，上と下とは皆な道なり / 夫れ魚 躍るを以て飛ぶと爲す，猶お鳶の飛ぶを以て躍ると爲すがごときなり，詩に即して以て道を觀るを言う，其の上下 均しく察かなるを見る可からざらんや）

①以躍爲飛：題目を含む第十二章第三節は「詩云，鳶飛戾天，魚躍于淵。言其上下察也（詩に云う，鳶飛んで天に<sup>いた</sup>戻り，魚 淵に<sup>おど</sup>躍る，と。言其の上下に<sup>あきら</sup>察かなるを言うなり）」。

[破題上句:] 明補す。却って空衍（むなしくただよ）するに非ず（『搭題文模了然』卷一・六葉・「偏全題明破式」条）。

題目：友多聞，益矣（『論語』季氏）

藉多聞以廣直諒，而益友備矣 / 夫多聞未必皆直諒，而正可以濟直諒也，友之者不交受其益哉（「多聞」に藉りて以て「直」・「諒」を廣くす，而して「益友」 備われり / 夫れ「多聞」は未だ必ずしも皆な「直」・「諒」ならず，而れども正に以て「直」・「諒」を<sup>すく</sup>濟う可きなり，之を友とする者は其の益を交受せざらんや）

[破題上句:] 明補す。却って空衍（むなしくただよ）するに非ず。

[承題二句:] 總じて要説き得て理有りを要す。空套（内容のない形式）の語に落ちる可からず（『搭題文模了然』卷一・六葉～七葉・「偏全題明破式」条）。

## [暗破法]

字面を<sup>あら</sup>露わさず。而して語氣・神理 確として<sup>くつがえ</sup>泛さず，確として溢（あふれさせ）ず。是れ法を得と爲す（『搭題文模了然』卷一・七葉・「暗破法」条）。

題目の字面をあらわさないで、題目の語氣・神理をはっきりとくつがえさず、はっきりと溢れさせない。これで暗破法の解法を得たとする。

[割截題暗破式]

解説なし

[用例]

題目：唯堯則之 蕩蕩乎（『論語』泰伯）

帝徳法天，其廣遠<sup>①</sup>〔割注：便ち是れ「蕩蕩」なり〕可想矣／夫至於則天，堯之大，一天之大矣〔割注：上を抱く〕，聖人所以擬其蕩蕩歟（帝徳 天に法る，其の廣遠なること想う可し／夫れ天に則るに至る，堯の大なるは，一天の大なり，聖人 其の「蕩蕩」たるに擬する所以なるか）（『搭題文模了然』卷一・七葉・「割截題暗破式」条）。

①廣遠：題目の朱注に「蕩蕩，廣遠之稱也（蕩蕩は，廣遠の稱なり）」。

題目：儼然，卽之也（『論語』子張：子夏曰，君子有三變，望之儼然。卽之也温，聽其言也厲）

道貌可望而知也，遠觀者尤宜近視焉／夫儼然之貌，特望之而未卽之耳，欲觀君子者，何不可卽之者（道の貌（容貌）は望みて知る可きなり，遠く觀る者は尤も宜しく近づき視るべし／夫れ儼然の貌，特に之を望みて未だ之に卽かざるのみ，君子を觀んと欲する者は，何ぞ之に卽くを不可とする者ならんや）

①道貌：題目の朱注に「儼然，貌之莊也（儼然は，貌（容貌）の莊（莊嚴）なり）」。

〔破題上句：〕「道貌」は便ち是れ「儼然」の二字の眞際（眞義）なり。「望」字は截し得て清なり。

〔破題下句：〕上の「望之」に<sup>したが</sup>跟う。<sup>まさ</sup>恰に是れ題分なり（『搭題文模了然』卷一・七葉・「割截題暗破式」条）。

題目：雖執鞭之士，吾（『論語』述而）

極求富之術，而示之以身焉／夫求富之術，至執鞭極矣，夫子盡其辞而返諸己，殆卽身以示人耳（富を求むるの術を極め，而して之を示すに身を以てす／夫れ富を求むるの術は，執鞭に至りて極まれり，夫子 其の辞を盡して諸を己に返す，殆んど身に<sup>これ</sup>卽きて以て人に示すのみ）

〔破題上句：〕「極」字を用いて「雖」字に代う。上界を截清す。「求」「富」字は上に連なると謂うを得ず。

〔破題下句：〕「吾」字は，其の声を聞くが如し。

〔承題首句：〕「雖」字 <sup>すべ</sup>都て到る（『搭題文模了然』卷一・七葉・「割截題暗破式」条）。



題目：薄税斂 易耨（『孟子』梁惠王上）

民不困於重征，而力田者多矣 / 夫税斂不薄，其害與煩刑等〔割注：上を抱く〕，既薄矣民誰不盡力於耕耨乎（民 重征に困らず，而らば力田する者 多し / 夫れ税斂（税の取り立て）薄からず，其の害と煩刑とは等し，既に薄くす，民 誰が力を耕耨に盡さざんや）

〔破題上句：〕重からざれば便ち是れ薄なり（『搭題文模了然』卷一・七葉・「割截題暗破式」条）。

〔割截題反破暗破式〕

解説なし

〔用例〕

題目：日月 蛟龍（『中庸』第二十六章第九節）

使昭明<sup>①</sup>者而可以盡天也，則神奇者可以盡水矣 / 夫係於天，即覆於地，地與木<sup>マ</sup>木<sup>マ</sup>（山水）皆覆於天者也，彼鼃蛟龍<sup>②</sup>，遂盡水之不測哉（昭明なる者にして以て天を盡す可きなるや，則ち神奇なる者も以て水を盡す可し / 夫れ天に係れば，即ち地<sup>おお</sup>に覆わる，地と木<sup>マ</sup>木<sup>マ</sup>（山水）皆な天<sup>おお</sup>に覆わる者なり，彼の鼃蛟龍<sup>げんだこうりゅう</sup>，遂に水の測られざる（不測：見当もつかない多さ）を盡さんや）

①昭明：題目の截去された「今夫天，斯昭昭之多（今，夫れ天は，斯れ昭昭の多きなり）」の朱注に「昭昭，猶耿耿，小明也（昭昭は，猶お耿耿のごとし，小明（ちいさな明るさ）なり）」。

②水之不測：題目と截去された下文に「今夫水，一勺之多，及其不測，鼃蛟龍魚鼈生焉，貨財殖焉（今，夫れ水は，一勺の多きなり，其の測られざるに及び，鼃蛟龍魚鼈 生じ，貨財 殖す）」。

〔承題末句：〕魚の鼈に在る有り（『搭題文模了然』卷一・八葉・「割截題反破暗破式」条）。

〔割截題抱上文暗破式〕

解説なし

〔用例〕

題目：喻於義，小人（『論語』里仁：子曰，君子喻於義，小人喻於利）

以心〔割注：題界を截清す〕觀君子，可觀夫非君子者矣 / 夫所謂喻義者，心在於義也〔割注：「心」字を承明す〕，如此可以証小人〔割注：「証」字は妙なり。下意 亦た透露す〕（心を以て君子を觀れば，夫の君子に非ざる者を觀る可し / 夫れ所謂ゆる「喻義（義に喻る）」者は，心 義に在るなり，此の如くすれば以て小人を証す可し）（『搭題文模了然』卷一・八葉・「割

「截題抱上文暗破式」条)。

[割截題照下暗破式]

解説なし

[用例]

題目: 孔子亦囑 陽貨先 (『孟子』滕文公下)

術有出於一例者, 創此術者宜改計也 / 夫子之往拜, 與貨之致饋等, 孔子乎, 非待陽貨之先至乎 (術 一例に出づる者有り, 此の術を創る者は宜しく計を改むべきなり / 夫れ子の往きて拜するは, [陽] 貨の饋を致すと等し, 孔子なるや, 「陽貨の先<sup>さき</sup>ずる」に至るを待つに非ずや)

[破題上句:] [題目の]「亦」字の飛舞なり。

[破題下句:] 本位を截し得て住む。下文を呼得し起こす。

[承題末句:] 下意は, 立竿見影 (効果てきめん) なり (『搭題文模了然』卷一・八葉・「割截題照下暗破式」条)。

題目: 思齊焉 見不賢 (『論語』里仁: 子曰, 見賢思齊焉, 見不賢而内自省也)

有不甘於徒見者, 不得執此心以概所遇也 / 夫果能思齊, 賢者固不虛此見矣, 然所見豈能皆賢乎 (徒だ見るに甘んぜざる者有り, 此の心を執えて以て遇う所を概<sup>なげ</sup>くを得ざるなり / 夫れ果して能く齊しからんことを思う, 賢者 固より此の見るを虚にせず, 然らば見る所は, 豈に能く皆な賢なるか)

[破題下句:] [截去された] 下の「而」字の爲<sup>ため</sup>に勢いを作る (『搭題文模了然』卷一・八葉・「割截題照下暗破式」条)。

(つづく)